

第174回くらしの植物苑観察会 2013年9月28日(土)

—「伝統の朝顔展の裏側」—

(国立歴史民俗博物館くらしの植物苑 山村 聡)

朝顔は、日本では夏の朝を飾る草花として知られていますが、日本原産の植物ではなく、奈良時代に中国大陸より薬として日本列島に伝えられました。やがて、江戸時代の都市では、園芸が盛んになり、江戸時代後期にもなると、園芸の主流が庭園での地植えから鉢植えへと移り変わることによって、庶民にも身近なものとなりました。こうした中で、朝顔は庶民に親しまれる花となります。また、突然変異で生まれた奇抜な変種(奇品)を楽しむ人々があらわれました。こうした中で、丸咲の原種に近い朝顔の中から、葉も花の形も変化に富んだ、いわゆる変化朝顔が選抜され、育成されるようになりました。

くらしの植物苑では、1999年より、世界でも類例を見ない特異な朝顔の世界に着目し、歴史学と自然科学(遺伝学)双方の視点から、とらえなおし、生きた朝顔を歴史資料として、国立の研究機関や各地の同好者によって保存されてきた変化朝顔・大輪朝顔・肥後朝顔などの系統を収集してきました。



この収集してきた朝顔の中から、毎年、変化朝顔(正木系統：約40系統、出物系統：約25系統)、大輪朝顔を約25系統、近縁種を約10系統選出し、約2000粒の種子を播き、苗の仕分け(選別)を行い、約500鉢の朝顔を展示してきました。

今回の観察会では、「伝統の朝顔」展を開催するにあたって、その裏側(準備から種の保存まで)の作業などを、紹介していきたいと思います。

「伝統の朝顔」展は、毎年、7月下旬～9月上旬と長い期間、展示を行っています。この展示を行うために、準備を5月から行い、朝顔の選出、播種を行います。播種の準備として、培養土作り、種子の芽きり作業を行います。また、播種は、出物系統→正木系統・大輪朝顔の順に行います。播種後、気候条件によって異なりますが、約1週間で双葉が出揃います。

展示で一番重要な作業は、苗の仕分け(選別)です。変化朝顔(出物系統)は、最低でも2回の選別を行います。1回目は、双葉の状態を選別します。2回目は蕾で選別(牡丹探り)します。おしべの葯の有無で、一重か牡丹かを確認し、選別できたものから展示鉢に植えていきます。正木系統・大輪朝顔は、基本的には同じものが咲きますが、花色・葉色が変化することがあり、確認してから展示鉢に植えます。仕立て方としては、「行灯作り」や「ラセン作り」などがあり、行灯作りは、本葉が5～8枚になったところで、



本蔓を摘心し、子蔓を3本残し巻き付けます。ラセン作りは本蔓と子蔓を巻き付けます。

展示が始まると毎日、午前中につるまき・つるの整理、午後から花摘み作業を行います。また、夕方に翌日の開花が見込める鉢の入れ替えを行います。

展示期間が終わると系統保存するため、種採りの準備を行います。種採りは1株ごとに行い、番号をつけて保存します。同じ系統でも複数の株を混ぜて採種しないようにします。

採種したものは、陰干し、乾燥させ、紙封筒などに入れ、タッパーなどの容器に入れて保存します。保管場所は、温度変化の少ない涼しい場所か冷蔵庫(野菜室)などに入れて保存します。

最後に系統を維持していく上で、変化朝顔(出物系統)は、9月に試し蒔き作業を行います。過去に採種したものなど、遺伝子の確認していない種子を播種します。9月に行うことで、気温は高く、日長が短いため、株が小さいうちに開花し、遺伝子の有無の確認ができ、種子の整理を行い、保存します。

以上のような作業を行い、栽培、展示、保存を行っています。朝顔の栽培等に、ご参考になれば幸いです。



.....

次回予告 第175回くらしの植物苑観察会 2013年10月26日(土)

「暮らしの中に息づく植物」 天野 誠(千葉県立中央博物館 植物学研究科 主任上席研究員)
13:30~15:00(予定) 苑内休憩所集合 申込不要